どんぐりと山猫

宮沢賢治

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま　九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほうで、けっこうです。あした、めんどなさいばんしますから、おいでんなさい。とびどぐもたないでください。

山ねこ　拝

こんなのです。字はまるでへたで、墨もがさがさして指につくくらいでした。

注文の多い料理店

宮沢賢治

二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、あるいておりました。それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、どこかへ行ってしまったくらいの山奥でした。やがて二人は、西洋料理店「山猫軒」という札を見つけました。

野ばら

小川未明

大きな国と、それよりはすこし小さな国とが隣り合っていました。その国境には、両方の国から兵士が一人ずつ出て、境を守っていました。大きな国の兵士は老人で、小さな国の兵士は青年でした。ちょうど、国境のところには、だれが植えたということもなく、一株の野ばらがしげっていました。春になると、野ばらはうす紅色の花をたくさん咲かせました。

小学2年生から読む　日本の名文

一房の葡萄

有島武郎

僕は小さい時に絵を描くことが好きでした。僕の通っていた学校は横浜の山の手という所にありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町でした。学校の行きかえりには、いつでもホテルや西洋人の会社などがならんでいる海岸の通りを通るのでした。真青な海の上には、軍艦や商船がいっぱいならんでいました。

杜子春

芥川龍之介

ある春の日暮れです。唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

若者は名を杜子春といって、元は金持ちの息子でしたが、今は財産を費い尽くして、その日の暮らしにも困るくらい、あわれな身分になっているのです。門いっぱいに当たっている、油のような夕日の光の中を、人々が絶えず流れて行きました。